〈リレートーク3〉

平和の日に想う　命

志茂田景樹＋中島京子

■昭和5年の中流家庭

志茂田　僕は今日、普段より地味なファッションで来ました。というのは、僕は毎年2～3回、東北の被災地慰問をやっているんですが、初めて東北の被

災地を慰問したときに、被災地だから少し地味な格好をして行かなければいけないかなと思ったんですね。それで自己規制して地味な格好をして行ったら、がっかりされたんですよ。だから、普段の自分の通りで行けばいいのだなと、そのとき認識を新たにしました。ここ富山市は被災地ではありませんので、多分にファッションが地味になったということです。

今日は僕から中島さんにいろいろと聞いていいですか？

中島　はい。すごく大変格調の高いトーク、歌や朗読やヒツジの鳴き声まであるトークの後で、私はもう志茂田さんのインパクトだけを頼りにここに座っておりますので、よろしくお願いします。

志茂田　中島さんの直木賞受賞作『小さいおうち』が映画化されましたね。僕は映画は見ておりませんが、リレートークがご一緒だということになって、作品をもっと早い時期に読んでおこうと思ったんですね。ところがぎりぎりになって、今朝2時に起きて、読み始めたのは2時半。5時間かからないで一気に読み終えました。

中島　申し訳ありません。

志茂田　あれは500枚近くあるんですか？

中島　そうですね。読むスピードがすごいですね。

志茂田　とても素晴らしい作品でした。『小さいおうち』をお読みになった方、手を挙げてください。結構いらっしゃいますね。

中島　ありがとうございます。

志茂田　とても胸を打ち、しかも、どんどん読み進められる。あれだけさりげない筆力というのは、とても珍しいと思います。

中島　ありがとうございます。

志茂田　主人公のタキちゃんは女中さんですよね。昭和初期から戦争が始まるまでの時代、東京の中流のサラリーマン家庭では女中さんを置いている家が多かったんですよね。

中島　お父さんとお母さんと子供が1人か2人という核家族の家でも、女中さんがいたんですね。

志茂田　タキちゃんが出てくるのは昭和5年ですよね。あの時代に女中さんを「さん」とか「ちゃん」を付けて呼ぶ家庭は少なかったと思う。

中島　そうみたいですね。「タキ」と呼び捨てみたいにね。

志茂田　それだけタキさんという女中さんは、頭が良くて大事にされたということなんでしょうね。それで僕が一番「ああ、鋭いな」と思ったのは、時子さんが板倉正治さんと不倫のような感じで推移してきたときに、タキが、帯の結び方が家を出ていったときと帰ってきたときと違う、と言うんですよね。模様の位置が違うんですが、あれがタキのとても鋭いところではないかなと。

僕はあの場面でどきっとしました。と言うのも、僕はある日、背中に犬の絵模様があるTシャツを着て家を出たんですよ。それで、次の日に帰ったときは、前に猫の模様のあるTシャツを着ていました。

中島　あ！　それは大変なことになりそうですね（笑い）。

志茂田　今日、途中で気に入ったTシャツを見つけたから、前のは捨てて着替えてきたんだよと、こう言いました。

中島　そんな言い訳が通るものなんでしょうか？

■昭和15年の時代状況

志茂田　あの小説を読み進めるに従って、僕はタキちゃんが好きになりました。そして、ある章の第何項かで「昭和15年といえば」という書き出しのところがありますよね。僕は昭和15年、1940年生まれで、皇紀は二千六百年。奉祝の年で、いろいろな催しが行われたんですよ。

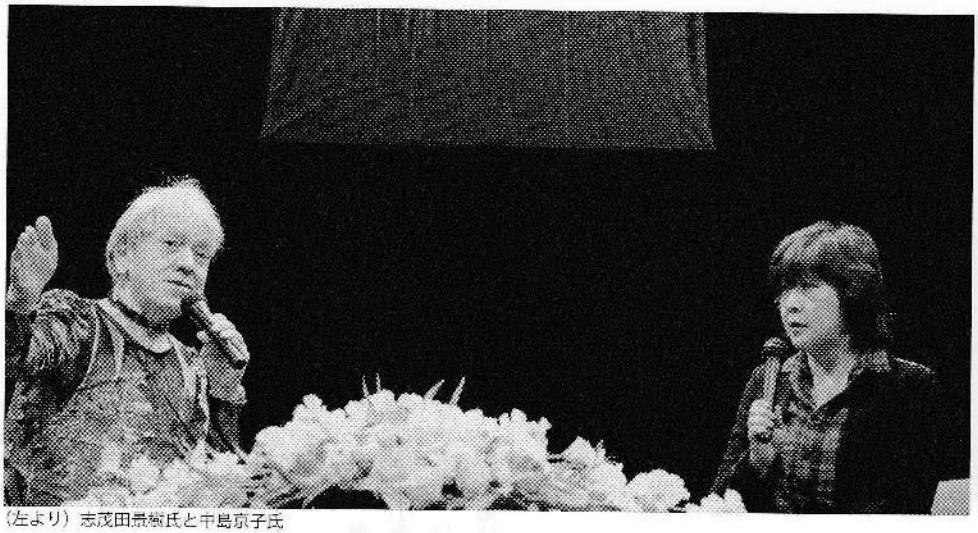
中島　そうですね。本当にすごかったみたいですね。奉祝音楽会というのが歌舞伎座で催されました。リヒャルト・シュトラウスとか世界中の有名な作曲家がそのためにわざわざ作曲したという、ものすごく贅沢な演奏会が開かれました。

志茂田　小説で描かれているのは歌舞伎座での奉祝音楽会。あれには驚きました。歌舞伎座でクラシックをやったということですよね。

中島　そうですね。びっくりですね。当時は歌舞伎座をいろいろな催し物に使っていたということもあるんでしょうし、そういうすごいことをやる

なら歌舞伎座、みたいなものがあったんですかね。

志茂田 昭和15年の翌年12月が開戦ですよね。その1年前に歌舞伎座でクラシックをやったというのが、とてもすごいなと。



(左より) 志茂田景樹氏と中島京子氏

中島 そうですね。

志茂田 僕は昭和20年に5歳でしたから、少し戦争を知っています。でも、僕より後の世代の人は、昭和15年というと、とても息苦しい時代というようなイメージで歴史を習っている、歴史を受け取っているんですよ。でも、あの小説に書かれている平井家という家庭は、何かとても楽しそうですね。

中島 そうですね。ちょっと能天気過ぎるのではないかというところもあるんですけど、ただ、外地でいろいろなことが起こっていても、自分たちの生活がそんなに逼迫してこないうちは結構楽しくやっていたと、そういうところがあったのではないかと。記録を見ていてもそういうことがあります。それは良いところもあるのだけれど、ちょっと怖いところもありますよね。

志茂田 なるほどね。それで、小説の終わりの方で、東京郊外のあの小さいおうちのある場所が特定できないまでも、千歳船橋の老人会の人たちが出てきますね。それで僕はふっと思い出した作品があるんですよ。

中学生のときに読んだ徳冨蘆花の『不如帰』です。その後、徳冨蘆花が東京郊外の田舎住まいみたいなことを始めたときのエッセイ『みみずのたはこと』があるんですね。徳冨蘆花と親交があった柳田國男が「蘆花君の『みみずのたはこと』」というタイトルで、今で言うと書評に近いエッセイを書いている。粕谷村の隣の村に自分が越してきたことを明かしているんですけれども、粕谷村は当時の千歳村字粕谷。その隣の村が砧村で、今の世田谷区の成城あたりです。

だから、あの小説の舞台が何となく分かってくるんですけれども、赤い屋根の洋館ですよね。昭和10年代の、中央線沿線だったら杉並区、小田急沿線だったら成城辺りに、洋館や和洋折衷の新しい住宅がどんどん建っていたころなんですよね。

中島 すごくいっぱい、どんどん建ったみたいですね。だから、みんなよく似た形をしていて、和洋折衷ですよね。家の中に入ると、横に応接間というか洋間があって、もうちょっと入っていくと和室があって、床の間があってというような、そういうおうちが結構たくさんあって……。

志茂田 玄関を入って右手が洋間の、客間という感じでね。その洋間の作り方が、それぞれこだわりがあったんですよね。僕がまだ20代、30代のころはそんなうちが残っていましたね。でも、中に入ると窓の感じなんかが微妙に違う。だから、ああいう時代、平井家は玩具会社のサラリーマンなんですが、物質的なという意味ではなくて、意外と精神的にもすごく豊かな生活を送っていた人たちなのではないかと思うんです。歴史で習うと、もうファシズムの時代、息苦しいような時代になっていくでしょう。そうじゃなくて、意外と闊達な生活をしているんです。

中島　そうですね。

志茂田　それを『小さいおうち』という作品はうまくとらえているなと思いました。

■昭和20年8月15日

中島　志茂田さんは昭和15年のお生まれですが、終戦時に5歳だと戦争のことはあまり記憶にはないですか？

志茂田　5歳だとちゃんと覚えているんです。僕は国鉄職員の家に生まれたので、東京都下の小金井町、今の小金井市に官舎があったんですよ。父は現場の人間で、トンネルを造ったり、橋を架けたりという土木関係の仕事で、官舎に住んでいても出張していることが多いんです。でも、僕が5歳のとき、昭和20年には父が官舎にいることが多かったというのは、鉄道工事が少なくなっていた時代だったと思うんです。

中島京子氏

中島　ああ、そうですよね。鉄道工事なんてなさそうですね、鉄がないし。

志茂田　父の、現場ではない詰め所が小金井の官舎の近く、歩いて10分ぐらいのところにあって、その事務所へ通勤していました。父はいつも昼飯を食べに官舎へ戻ることが多かったんですが、あるとき、勢い込んで庭の木戸口から入って来たんです。ちょうど僕が縁側にいたときで、父は台所にいる母に「おい、戦争が終わったよ」と大きな声で言ったんです。それが昭和20年8月の終戦の日だったんです。

　それで母が奥から出てきて「ほんとですか」と聞くと、父は「今、詰め所のラジオで聞いたところだ」と言ったんです。そしたら母がへなへなっと膝を崩しました。でも、それは後で考えると、ホッとしたんですね。廊下のすぐそばの畳の所で母が崩れた光景をはっきりと覚えています。

中島　お父さまもホッとしたというか、そういう感じのお知らせだったのでしょうね。

志茂田　はい。とても聞き取りづらい玉音放送を聞いて、ホッとしたんでしょうね。

中島　聞き取りづらい玉音放送をみんな泣きながら聞いたとか。

志茂田　直立不動で聞いて、どうやらこれは負けた、ポツダム宣言を受け入れての降伏ということだと分かったときに、みんなものすごく悲しんだかもしれないけれども、当時の庶民というか、普通の生活をしていた人たちは意外と、ホッとしたのではないかな。そういう印象を僕は持っているんです。

中島　そうかもしれませんね。

志茂田　その前に、一つ、すごく印象に残っている光景があるんです。空襲がしょっちゅうあって、空襲警報が出るとすぐ防空壕に入ったんですね。でも、そのうち防空壕に入らなくなってしまった。空襲だ空襲だと言いながら、官舎が空襲されたことがないもので、空襲警報があっても防空壕に入らない。特に夜間の空襲警報は防空壕に入らないで、空襲警報が解除されるまで待っているんです。

　でも、あるとき、外で待っていたら、これは母親の背中に負ぶられて見た光景かどうかがはっきりしないのですけれども、東の空が真っ赤に焦げている。3月10日の東京大空襲ですね。もちろん、そのときはそんなことは分からなかった。あのとき見た空が真っ赤に焦げていたのは、一夜で10万人ぐらいの人が亡くなった東京大空襲のときの火だと、後で分かったわけですけどね。

中島　今日、皆さんにご紹介しようと思って、志茂田さんが書かれた絵本『キリンがくる日』を持

ってきました。この絵本を紹介する前に、今の話のつながりで言えば、この絵本を読んだときにすぐに思い出したのが『かわいそうなぞう』という絵本のことです。

志茂田 ああ、僕も読みましたよ。

中島 『かわいそうなぞう』を読まれた方はたくさんいらっしゃるかと思うんですけれど、太平洋戦争のときに、もう動物を飼っていられない、爆撃で檻が壊れて猛獣が逃げ出したりしたら困るというので、動物がみんな殺されて、最後まで残った象を飢え死にさせるという話です。子どものときに読んで、泣いて泣いて……。

志茂田 象は空腹で、えさが欲しいため、一生懸命に芸をするんですよね。

中島 そうそう。ワンリーとトンキーが一生懸命に芸をするんです。子ども心にすごくつらかった。今日のテーマは「命」ということですので、それこそ子どものときに命について考えさせられた一冊だったと思います。

志茂田 僕の絵本『キリンがくる日』は、釧路の動物園の話がモデルです。

中島 これです。(絵本を掲げる)

志茂田 釧路の動物園の園長さんが、動物を見に来てもらいたいが、そのときに動物が見せるいろいろな仕草とかはとても愛らしいけれど、その動物の命が輝いているのを見てほしい、というようなことを言ったんです。それがモチーフになって作った物語がこれなんです。

■漱石の『夢十夜』

志茂田 今日は「命」がテーマなので、中島さん、ご自分の作品の一節でもいいのですが、命に関わったものをちょっと朗読してくれませんか。僕も後で短い詩を朗読します。

中島 そうですね。自作でも自作じゃなくても、ということなので、持っていた本の中で思いついたのが、夏目漱石の『夢十夜』の中の「第一夜」です。

なぜ選んだかと申しますと、これは「死ぬ」と言って死んじゃう女の人の話です。「百年待っててくださいね。そしたら生き返るから」って、とんでもないことを言って亡くなってしまうんですが、それで男の人が待ってるっていう話なんです。

それで「命」ということを考えたときに、例えば震災でたくさんの人が亡くなってしまったことを考えますよね。私も一昨年の暮れに父が亡くなったものですから、亡くなった人と一緒に自分が生きてる感覚といったものを考えていたので選びました。ちょっと不思議な作品で、最後の方だけ朗読してみようと思います。

自分は苔の上に坐つた。足から百年の間かうして待つてゐるんだなと考へながら、腕組をして、丸い墓石を眺めてゐた。そのうちに、女の云つた通り日が東から出た。大きな赤い日であつた。それが又女の云つた通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのつと落ちて行つた。一つと自分は勘定した。

しばらくすると又唐紅の天道がのそりと上つて来た。さうして黙つて沈んで仕舞つた。二つと又勘定した。

自分はかう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせない程赤い日が頭の上を通り越して行つた。それでも百年がまだ来ない。仕舞には、苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなからうかと思ひ出した。

すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなつて丁度自分の胸のあたり迄来て留まつた。と思ふと、すらりと揺ぐ茎の頂に、心持首を傾けてゐた細長い一輪の蕾が、ふつくらと弁を開いた。真白な百合が鼻の先で骨に徹へる程匂つた。そこへ遥の上から、ぽたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花弁に接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思はず、遠い空を見たら、暁の星がたつた一つ瞬いてゐた。「百年はもう来てゐたんだな」と此の時始めて気が付いた。(拍手)

志茂田 『夢十夜』っていうのは不思議な作品で

すよね。

中島　そうですね。すごく不思議な作品なので、解釈はいろいろあるかなと思うんですけれども。

志茂田　それはやはり、今の朗読を聞いた皆さんそれぞれがイメージしていただければ……。

中島　そうですね。それぞれに解釈されていいですね。

■水上不二の詩

志茂田　僕も聞いてもらいたい詩があるんです。短い詩で、僕の作品ではありません。なぜこの詩を朗読したいかについて、ちょっと話をさせてください。

２０１１年の暮れのことです。気仙沼大島という所でお話の会をやっている主催者の人が「私たちの島、気仙沼大島も大きな津波の被害を受けました」と電話をかけてきたんですよ。津波だけではなくて、気仙沼で壊れた重油タンクが海を渡って、それも燃えながら渡ってきた。

中島　大変な火事になったんですよね。

志茂田　島のそれこそ3分の1ぐらいの部分、丘陵、山岳部の樹林が焼けてしまった。津波による被害者は27名でした。今ようやく、みんなが痛手から立ち直って、これから復興していこうじゃないかという気持ちになったところなので、ぜひ私たちの島にも来ていただけないかと。そういう電話でした。

中島　「よい子に読み聞かせ隊」で、この絵本を読んでいらっしゃるんですよね。

志茂田　そうです。それで、もちろん僕は二つ返事で行くことにさせてもらったんですけれども、気仙沼大島という島をあまり知らないんですよ。ネット検索で調べたら、最盛期には５５００～５６００人、被災したときは３７００～３８００人の人口があった。とてもいい魚が水揚げされる所で、特にイワシの形のいいのが揚がる。

そして、この島のことをこう讃えた詩人がいるんです。「海はいのちのみなもと　波はいのちのかがやき　大島よ　とこしえに緑の真珠なれ」と。「緑の真珠」というこんな素晴らしい賛辞を与えた人は誰だろうかと思って見たら、水上不二という人だったんですね。その名前に気づいたとき、僕は思わず叫び声を上げたんです。と言うのは、小学校5年のとき、小金井の小学校にいたんですけれども、水上裕子さんという名の転校生が入ってきました。大柄のすごく口数の少ない子で、休み時間はいつも本を広げている。あるとき、担任の先生が「裕子ちゃんのお父さんは物書きだよね」と言ったんです。

そのとき、僕はぴんときたんですよね。なぜかと言うと、当時発刊してまだ1年もたっていない「少年」という雑誌を僕は講読していたのですが、その雑誌には横長のコラム欄があって、そこに詩が連載されていた。ヨットが出てきたり、きれいな貝殻が出てきたり、白い波が出てきたり、灯台が出てきたり、といつも海にちなんだ詩でした。僕は東伊豆の海辺の宇佐美で生まれ、海と離れた東京都下に移りましたから、その詩がとても心に残って、毎月楽しみにしていたんですよ。

それで、担任の先生が水上裕子さんに言ったことを聞いたときに、「あ、水上不二さんがお父さんだ」とぴんときたんです。それで翌日、「少年」の最新号を学校へ持って行って、そのページを広げて、「これ、裕子ちゃんのお父さんだよね」と言ったら、黙って大きくうなずきました。その裕子ちゃんのお父さんの島へ行くことになったんです。

東京に戻って来て、水上不二さんの作品を国会図書館で調べたんです。雑誌は調べきれなかったので、単行本を調べました。でも2冊しかなく、「少年」に載っていた詩が出てこないかと探しました。童話も入ってましたけれど、これだと特定できる詩は見つからなかった。「少年」に連載していた詩は収録されていないということなんです。

代わりに、水上不二さんの素晴らしい詩に出会いました。今、弱者をすごくいたぶってしまうということが多いじゃないですか。川崎の中学生殺人事件を見てもね。

中島　本当に痛ましいことですよね。

志茂田　水上不二さんの詩は、弱者の命をとても尊く思う、そういう心が伝わってくるんですね。

それを朗読させていただきます。「いわし」というタイトルです。

いわし、いわし、いわし、泳いでいけ
青い海を急いでいけ
たった一匹残されて　いけすのなかを泳いでいる
いわしをぼくはにがしてやった
波があかるくうたってる　いけすの外の青い海

志茂田景樹氏

いわしに自由をあたえてやった
いわしはそれがうれしくて　ぼくにお礼を言ったのだろう、
体をふって　いきいきと　海をしばらく渡っていった
おとうさんが　おきで　まっている
おかあさんが　おきで　まっている
いかや　かつおに　みつかるな
くじらや　いるかに　食われるな

ぼくは祈った　いわしのために
しあわせな旅を　しあわせを
いわし、いわし、泳いでいけ
青い海を急いでいけ（拍手）

中島　すごく励まされるというか、優しい詩ですね。

志茂田　中島さんも3月生まれですよね。3月23日の生まれ。

中島　そうです。志茂田さんとは誕生日が近い。2日違いですよね。

志茂田　僕は3月25日生まれです。この詩に出会ったときは71歳だと思いますけれども、そのとき、すごく励まされた、背中を押された気持ちになったんですね。僕は年齢に関係なく、いつも前を見て生きたいなと、そういう気持ちでおりますので、この詩を読んで、いけすから救い出されたいわしを自分に重ねて、とても心の中が温かく、豊かになりました。

中島　そうですね。志茂田さんはツイッターでも相談を受けられて、発信していらっしゃるんですよね。

志茂田　ええ。初めは相談に応じるということではなく、自分が思っていること、もしかしたら多くの人にもきっと同じような思いがあるんじゃないかなということを、140字以内の言葉にして発信していた、呟いていたんです。それが割と反響がよくて、返信にいつの間にか質問や相談事が混じるので、それに答え始めたのがそのまま続いているということなんです。5つないし10ぐらいを答えてますね。

中島　志茂田さんの言葉に、「いわし」の詩のように励まされている方がいっぱいいらっしゃるんでしょうね。

志茂田　ありがとうございます。僕らのテーマは「命」ですけれども、命っていうのは、心の中が豊かに、力が湧いてくるような、そういう感じでいきたいですね。

中島　そうですね。春、芽吹きのシーズンも近いということなので…。

志茂田　いろんなものが芽吹くときですから、皆さんもいろんなものを芽吹かせて、元気にやりましょう。僕らも、元気で頑張りたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

中島　ありがとうございました。（拍手）